



平成29年9月1日号 (No.179)

「人を責めず、事実に焦点をあてる」

伊丹市立総合教育センター
所長 後藤 猛虎

今年の夏の甲子園は、花咲徳栄高校の優勝で幕を閉じたが、記憶に残るサヨナラゲームがありました。それは、第11日(19日、甲子園)、大阪桐蔭(大阪)が仙台育英(宮城)に9回二死から悪夢の逆転サヨナラ負けを喫し、8強入りを逃した試合です。

1-0の9回二死一、二塁の守備で、打球を処理した泉口君(3年)が一塁へ送球し、ゲームセットと思われました。ところが一塁手の中川君(2年)がベースを踏んでおらず、すぐに踏み直したが「セーフ」の判定で満塁となりました。まさかのピンチに、ここまで好投していた先発・柿木君(2年)が中越え二塁打を浴び、2者の生還を許しました。

中川君は「(アウトが)残り1個で焦りが出てしまって、ベースを踏むということよりもボールを捕るということを第一に考えてしまった。でもすぐに踏んだつもりだったけど、セーフと言われてしまって…」と。

この場合、多くの人が、「勝った試合なのに、何をやっているんだ、1塁手!!」と、ミスした1塁手を責めたのではないのでしょうか。しかし、大事なことは、このミスを再発させないために、どう対応したらよいかを考えることです。

このことについて、元住友電工伊丹製作所 近藤 和之所長による「企業から学ぶ人材育成」の講話から学ぶことができます。

それが、「人にではなく、状況、問題、行動に焦点をあてる」です。

近藤所長は、「製作所のような生産現場では安全に関する事故が起きる。その時、リーダー(メンバー)に求められるのは、ミスをしたり、事故を起こしたりした人を感情的に責めるのではなく、状況や問題、行動などの事実に焦点をあて客観的に見ることだ。人(人格や性格)に焦点をあてていると的確な判断ができなくなり、効果的に問題を解決することが難しくなる」と言っています。

私たちは、ついつい失敗した当人を責めてしまい、そのときの状況や事実を冷静に判断できず、客観性を見失うことがあります。リーダーに限らず、教師として、児童・生徒に対して、ミスをしたり、問題行動をとったりしたとき、どのような対応をしたらよいか。示唆に富んだ話です。

さて、2学期は行事が多く、子どもがミスをすることもあるでしょう。状況や事実をしっかりと見て子ども達を指導してほしいものです。

ちなみに、史上初となる2度目の春夏連覇を逃した西谷監督は「ミスが出ましたけど、全員で戦っているの誰がどうこうというのはないです」と語っています。



学校紹介パネル展
1階展示ホールにて
各校園の特色がよく伝わってきます

道徳の授業と評価

よい教材には必ず生き方を**自覚(変化)**する出来事があります。そして、**自覚(変化)**する場面もあります。それらを見つけ出すためには、教材の深い読みと解釈が必要です。教材の分析には「分析シート」等を活用して**教材を構造的にとらえる**ことが、ねらいに迫る授業にするための必要条件です。

<教材分析のためのシート活用例>

※「はしの 上のおおかみ」(出典:わたしたちの道徳 小学校1・2年生)



教材名 (出典)	はしの上のおおかみ	
1 教材を読む (骨格をつかむ)	① 生き方を自覚(変化)したのは誰か(主人公)	おおかみ
	② 生き方を自覚(変化)することになった出来事(助言)は何か	くまがおおかみを抱き上げて、後ろへ回しておろしてやったこと
	③ 生き方を自覚(変化)するのはどこか	橋の上に立って、くまの後ろ姿をいつまでも見ていたところ
2	<p><構図></p> <p>出来事(助言)</p> <p>くまがおおかみを抱き上げて、後ろへ回しておろしてやったこと。</p> <p>自覚前 before</p> <p>「こらこら、もどれもどれ」と言って、みんなをもとへ、おいかえた。</p> <p>いじわるがとてもおもしろい。</p> <p>自覚(変化)</p> <p>この時のおおかみの心を考えさせる</p> <p>自覚後 after</p> <p>表情・言葉・行動</p> <p>うさぎを抱き上げて、どこいしょと、後ろへそっとおろしてやった。</p> <p>いい気持ちです。ふしぎなことに、前よりずっといい気持ちです。</p> <p>主人公の変容</p>	
3	中心発問	くまの後ろ姿を見ながら、おおかみはどんなことを考えていたでしょう。

道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えが深まるものを用意する。
中心発問の吟味は最も重要です。

道徳科の授業の実際(知から自覚への深まり)

- 道徳的な価値を自分のこととして考えるというねらいに迫る授業にするために最も大切なことは、主人公が生き方を自覚するところを**中心発問**として設定することです。
- 各教科の指導と道徳科の指導には、根本的な違いがあります。教科の場合は、知らないことを知る(無知⇒知)への飛躍が生じます。これに対して、道徳的なことは、**授業が始まるまでにすでに何らかの形で知っています**。つまり、授業では、**知から自覚への深まり**が求められます。知から自覚への橋渡しをするのが、教材の役割です。

授業前

授業

評価

◆ 導入段階・・・主題に対する児童生徒の**興味や関心を高める**段階

導入は簡潔に！教材を告げるだけでもよい。

◆ 展開段階・・・児童生徒が**道徳的価値の自覚を図る**最も大事な段階

教材の範読

教師が**範読**する。長い教材であっても急がず、児童生徒がイメージできるようゆっくり読む。

基本発問

最初の発問は登場人物の確認など、書いてあることを答えさせるような**簡単なもの**で、発言しやすい雰囲気をつくるとよい。

「えへん、えへん」といって橋を渡ったとき、おおかみはどんなことを思っていたでしょう。

中心発問までは、**ストーリーがつかめたらよい**ので、発問が多くならないようにテンポ良く進める。

中心発問

【対話する】

多様な考えをもとに**比べあい**、違いの意味を確認しあったり、対立し、**議論**するなど**児童生徒の考えを深めていくことが大切です**。

くまの後ろ姿を見ながら、おおかみはどんなことを考えていたでしょう。

- なぜゆずってくれたんだろう。
- うさぎさん達に悪いことをしてしまった。
- こんな風にすればよかったんだな。
- もう、いじわるはしないぞ。

① 受容する

児童生徒が自分なりに考えて発言したことを、受容し承認することが大切です。児童生徒の最も言いたいであろう言葉を復唱したり、「いいねえ」「なるほど」「素敵だね」と受け止めることが大切です。

② さらに問う(問い返し)

一問一答ではなかなか深まりません。「どうのこと?」「何でよかった?」「もう少し詳しく教えて」などと、児童生徒の発言を手がかりにさらに問う必要があります。さらに問うことによって、次第に主題に近づきます。

ポイント



◆ 終末段階・・・**1時間のまとめ**をする段階

教師の話は説諭や価値の押しつけにならないようにする。授業を通して、思ったことや感じたことなどを自由に書く時間を大切に。⇒書いたものが評価につながる。

◆ 評価方法の例



① ポートフォリオ評価

児童生徒の学習の過程や成果などの**感想文・作文**や**ワークシート**を計画的にファイルに集積。そのファイル等を活用して児童生徒の学習状況を把握して評価する方法。

② エピソード評価

児童生徒が道徳性を発達させていく過程での、児童生徒の**行動**や**発言**を具体的なエピソード(挿話)として累積することにより行う評価。

⇒『道徳ノート』等を活用し、多面的・多角的に評価できるようにする

夏

季

研

修

報

告

夏季休業中に総合教育センターで実施した研修・講座の中から3つについて内容等を紹介します。

「こころの理解講座③」(早稲田大学教授 河村 茂雄 氏) テーマ「Q-Uを活用した学級集団づくり」

内 容

- 学級集団を見る視点(ルールとリレーション)
- アクティブ・ラーニングを展開するために
- 学級集団と学力
- 目標となる学級内のリーダーとフォロアーのあり方



受講者からの声

- アクティブ・ラーニングの前提に学級満足度があるという考え方が新たな気づきだった。
- 「子どもが変わってもいつも同じようなクラスになる」、「クラスづくりを変えたいが、いつも同じになる」というのは、自分の力不足、知識不足ということがよくわかった。もっと、知識や技能を持てるよう学びたいと思った。

「保護者と教師のための講演会」(Toshi Yoroizuka オーナーシェフ 鎧塚 俊彦 氏) テーマ「職人力 ～パティシエは世界一幸せな仕事～」

内 容

- | | |
|------------------|-----------------|
| ➢ パティシエを目指す前 | ➢ 感謝の気持ち |
| ➢ パティシエを目指したきっかけ | ➢ チャンスとピンチは表裏一体 |
| ➢ 海外での修行 | ➢ 職人としてのこだわり |
| ➢ 親方と弟子 | ➢ 新たな挑戦 |
| ➢ 失敗の大切さ | |



受講者からの声

- 「苦勞するからチャンスが来る」という言葉が心に響いた。失敗しても挑戦していきたいと思った。
- 「ピンチの中にこそ、チャンスがある」や「全力で壁にぶつかる大切さ」のお話が印象に残った。
- 職人と教師の仕事は似ているところがあると感じた。先輩の技をよく見て、学んでいきたい。

「ライフスキル教育講座」(神戸大学名誉教授・伊丹市教育委員 川畑 徹朗 氏) テーマ「レジリエンシー(精神的回復力)を育てるライフスキル教育」

内 容

- セルフエスティームについて
- 薬物依存とセルフエスティームの関係について
- 薬物依存からの復帰におけるセルフエスティームの重要性について
- レジリエンシーについて
- レジリエンシーの高い子どもを育てるために



受講者からの声

- 子どもの自尊心を高めるために自己尊重をすることだけでなく、自己決定を尊重することの大切さを初めて知った。
- セルフエスティームについて学ぶことができ、こどもへのアプローチの視野を広げることができた。

発行 伊丹市立総合教育センター

月～金 9:00～21:00 所在地 〒664-0898 伊丹市千僧1丁目1番 TEL 072-780-2480 FAX 072-780-2482
土 9:00～17:00

休館日 日曜・祝日・年末・年始 総合教育センターHP <http://www.itami.ed.jp/>